

おわりに

情報技術の急速で、かつ予想をはるかに越える進展と社会の少子高齢化・高学歴化の趨勢の中で、本学は建学の精神であるキリスト教に基づく諸個人の人格形成を、教育の確固不動の理念としかつ目標としてきた。もとより高邁な理念と目標を、それぞれの学問分野とその組織において自覚的に達成するためには、常に大学としてふさわしい形態で遂行されているかどうかの点検と評価を自ら行わなければならない。今回、財団法人大学基準協会の正会員校として登録されて10年を迎えることを機会に、多数の教職員を動員して、指定項目別の自己点検と評価を行い、これをここに報告書としてまとめることができた。もとより報告内容に精粗や不統一が見られるであろうが、これも自己点検・評価の内実の一部として受け止め、今後の同種の企画に資するものと確信している。

ところで本学では、本報告書の随所に触れられているように、目下学長の具体的な大学改革案について全学的な検討が進められている。この学長提案は、本学の建学の精神を堅持しつつ、大学審議会答申『21世紀の大学像と今後の改革方策について』の、特に大学の個性化と教育研究の不断の改善の、本学におけるその具体化の指針と見ることができる。その際本学の目指す大学は、大学院重点化の大学ではなく、あくまでも個人の能力を最大限に導き出すような教養教育と、これを前提として行われる専門分野での研究と教育である。さらにその上に立てられている大学院は、社会的ニーズに応え得る種別化された大学院、すなわち研究者養成、高度専門職業人養成、現代教養人養成という明確な目的に方向付けられた大学院に変えていかなければならないとする考え方に立っている。

さて以上、いわゆる価値の多様化・多元化に対応すべく、これまで各学部・大学院が個別的に行ってきた改善・改革の実績を、改めて自ら批判的に点検・評価し、あわせて今後の改善・改革の方向を見定めつつ本報告書をまとめた。そして、本学の将来を総合的かつ有機的に方向付けるものとしての学長提案にも触れてきた。本報告書に対する適切な批判を得て、今後の本学の一層の改善・改革に資することを願って、結びとする。